

成人看護学

■構築の考え方

成人看護学では、老年を迎える迄の40～50年間とされている。対象は、青年後期から壮年期、向老期にある人々である。

青年後期は、急激な心身の成熟、親から独立し、職業を選択する時期であり、身体的な不均衡や心理・社会的な不安定が生じ危機をはらむ状態にある。壮年期は、結婚し、夫婦の協力のもとに家庭を築き、信頼と愛情と男女それぞれの役割を遂行する。妊娠・分娩を経て育児を行うなかで、父親役割、母親役割を果たす。結婚・妊娠・分娩・育児を通じて、家庭を築き営んでいくための身体の健康、および家族の人間関係、さらに家族における役割行動の遂行上の心理・社会的問題が、壮年期の重要な健康問題となる。成人期においては、様々な仕事上のストレス等が、健康問題として身体面・精神面・社会面と多大な影響を及ぼすことがある。

向老期は、身体的・精神的衰退の自覚や退職を迎える時期であるが、精神活動を充実させるとともに、これから迎える老年期の自立に向け準備する時期である。

老化の出現により生体機能の衰退をもたらす。老化の進行を抑え、老化からの機能低下に適応し、健康を保持していくことが必要となる。つまり成人期は、職業生活、家庭生活、人間関係も複雑で多様な役割を担い、自立していかなければならないという特徴がある。したがって、成人の健康問題はいかに身体機能の低下を予防し、そこで生じた機能低下に適応し、健康を保持するかということが重要となる。

「成人看護学概論」では、成人期にある対象の特徴や看護の目的を理解し、成人保健、健康段階別の看護について学ぶ内容とした。さらに、健康障害時の看護について、健康障害時の反応と適応過程を器官系統別に学んでいく。

「成人看護援助論Ⅰ～Ⅳ」では、器官系統別の特徴的な疾患主要症状に沿って、罹患した患者に対する看護について治療経過とともに学ぶ内容とした。

「成人看護方法演習」では、急性回復期・終末期の事例展開をアクティブラーニングで行う教育内容とした。演習を通して、判断力や応用能力、グループ間での協調性も養えるようにと教育に取り入れた。社会環境の影響と健康問題を考え、さらに個人の健康的な生活習慣獲得への取り組みをサポートし、セルフケアの確立をめざすための支援を考える。

急性期～回復期の事例展開では、身体侵襲に伴う生体反応について考え、観察技術・回復に向けた援助を学ぶ。さらに、手術に伴い生じた機能障害に対し、日常生活への適応に向けた支援の在り方を学ぶ内容を教育内容とした。終末期の事例展開では、死にゆく患者の受容過程を考えながら、患者が安楽に過ごせるように症状マネジメントや症状コントロールについて考え、どのように支援していくかを学ぶ内容とした。